

復活節第二主日

2010.4.11.

(ヨハネ 20: 19-31)

先週の日曜日、私たちは主の復活の大祝日を祝いまいした。そして、今日は復活節の第二主日です。教会の典礼は、復活祭から聖霊降臨の大祝日に至るまでのこの季節を復活節として、主の復活の喜びを祝います。このことは、復活祭の喜びに満ちた祝い是一日限りのものではないことを示しています。復活祭の日に、私たちは、十字架の上に死んで、墓に葬られた主が復活されたことを祝いましたが、私たちは、聖書に語られているイエス・キリストの十字架の死とその復活を、いわば、受難劇の観客のように鑑賞したわけでありませぬ。私たちのために不当にも死刑を宣告され、鞭打たれ、いばらの冠をかぶせられ、重い十字架を担ってゴルゴタの丘まで引き立てられ、十字架に釘付けにされて、人々の嘲笑的となったまま、ついに十字架の上に死んでゆかれたイエスが、三日目に墓のうちから復活されたことを、受難劇の主人公であるイエス・キリストに私たちの感情を移入して、その復活を喜び祝って満足しただけのことではないはずでせう。

私たちの主イエス・キリストの復活は、もしそのことが本当に起こらなかつたなら、聖書に語られているそれに続く一切のことも起こりえなかつたという意味で、私たちの信仰にとって決定的に重要な出来事です。けれども、弟子たちが復活されたイエス・キリストご自身に出会って、その復活を知ることがなかつたなら、そして、復活された主イエス・キリストのいのちの息吹を受けて復活の証人とされ、そのことによってイエス・キリストを信じる信仰を世界に向かって宣べ伝えることがなかつたなら、イエス・キリストを信じる信仰を伝える教会もなかつたことになり、わたしたちがその教会において、イエス・キリストへの信仰を宣言して洗礼を受け、キリスト者となることもなかつたはずでせう。今日の福音が示しているように、復活されて弟子たちの真ん中にご自身を現してくださり「あなたがたに平和がるように」と語りかけてくださった復活の主イエス・キリストは、私たちが受け入れた教会の信仰によれば、今日もこうして主の祭壇を囲んで、十字架の死から復活へという主の過ぎ越しの記念の祭儀であるミサをささげる私たちの真ん中にいてくださり、私たちを一つに結んでいてくださるのです。教会の典礼が復活節を祝うこの季節、私たちは主の復活が私たちの日々の中にもたらした、この喜びを特別に祝い味わうように招かれているのです。

復活の主がもたらしてくださる喜びはどのようなものであるのか、そのことを今日の福音に沿って確かめてみたいと思います。

周囲の人々を恐れて部屋の戸に鍵をかけ、引きこもっていた弟子たちの真ん

中に復活された主は立たれ、「あなたがたに平和があるように」と呼びかけられます。この最初の呼びかけは、今でもユダヤの人々が日常的に交わし合うあいさつのことばです。文字通りに訳すなら、「平和があなたがたに」「シャロームアレヘム」と主は呼びかけておられるのです。手足に十字架の釘跡を残す復活された主は、ご自分の十字架の苦しみと、あの時の弟子たちの仕打ちを全く意に介してはおられないかのように、十字架に自分を見捨てた弟子たちに向かって、いつものあいさつを交わしてくださるのです。この最初のあいさつのことばに、十字架の上で死んで、復活された主が弟子たちにもたらしてくださったことの全てが示されています。「平和があなたがたに」とのあいさつは弟子たちに真実平和をもたらしたのです。十字架の上にイエスを見捨て、逃げ出すことによって、イエスを裏切った自分たちの卑劣さは、十字架の上に死んで復活し、今自分立ちの目の前に立っておられる主によって徹底的にゆるされていることを、あのあいさつのことばによって弟子たちは悟ったはずです。幼かった頃、いたずらが母親に見つかって、一番怖かったのは、お仕置きよりも、その後、母親に口を利いてもらえなかったことだったという経験をお持ちの方も多いのではないかと思います。母親がいつもの調子に戻って声をかけてくれたときの、ゆるしてもらえたという安堵感は忘れられないものがあります。「平和があなたがたに」との復活された主のことばによって、弟子たちは自分たちがゆるされていることを知ったのです。十字架の上に主を見捨てた弟子たちは、この主のことばによって、自分たちの心の呵責から解き放たれたのです。

そればかりではありません。弟子たちの前に立たれた復活の主は、「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わす」と言われるのです。あの十字架の時にさらけ出された弟子たちの不甲斐なさにもかかわらず、あのようなことが全くなかったかのように、復活された主イエス・キリストはご自分が父なる神から受けておられた使命を弟子たちに託してくださるのです。弟子たちは信頼を裏切った自分たちを、なお信頼していてくださる主の愛を知ったのです。その主は、弟子たちに息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい」と言われます。弟子たちに吹きかけられた復活の主のいのちの息吹こそ聖霊とは何であるかを私たちに示しています。聖霊は、聖霊によっておとめマリアからお生まれになったイエスの中に常に生き、ヨルダン川での洗礼においてイエスの上に降り、イエスとともに働いてこられた神の力です。その聖霊が今や、復活の主のいのちの息吹となって弟子たちの中に注ぎ込まれるのです。土の塵から造られたアダムが神の息吹を吹き込まれて生きる者となったように、弟子たちは復活の主のいのちの息吹を吹き込まれて、新たな人として復活のいのちを宿すものとなったのです。

その弟子たちに復活の主はさらにことばを続けて言われます。「だれの罪で

も、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でもあなたがたが赦さなければ赦されないまま残る」。このおことばは普通、教会の指導者となる弟子たちに罪を赦す権能を授けることばであると説明されています。けれども、ここで強いてそのように言わなくてもよいのではないかと思います。復活された主のあのような大らかなゆるしをその身において体験した弟子たちは、復活の主に遣わされて、自分たちが経験したイエス・キリストが示されたゆるしの絶対性を伝えて行く者とされたのです。その弟子たちの前に、今やゆるすことの出来ない罪など存在しなくなったのです。「あなたがたが赦さなければその人の罪は赦されないまま残るのだ。私のゆるしと愛を知った今、あなたがたにそのようなことが出来るか」と弟子たちの前に立つ復活の主は言っておられるのです。

今日の福音は、復活された主の二度にわたる弟子たちへの訪れを語っています。最初の時にその場に居合わせなかったトマスが言ったことを、主は全てご存知で、二度目にはそのトマスのためだけに来てくださったかのようです。自ら自分の信仰を決定的に放棄しないかぎり、復活の主に見放され、落ちこぼれる弟子は一人もいないのです。今日の福音の箇所が続く結びのことばを見ると、二度にわたる復活の主の弟子たちへの出現を書き記したヨハネ福音書は、弟子たちに続く後の世代の信仰者たちのためにこれを書いたと告げています。復活の主が弟子たちにもたらしてくださったことは、同じ復活の主を信じる私たちのためにたらされたことでもあるのです。復活節を祝うこの季節、復活の主が私たちのためにもたらしてくださっていることを確かめ合い、その感謝と喜びのうちに、復活の主の恵みとしての私たちの信仰生活を大切にしたいと思えます。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高

高円寺教会の主日の説教はインターネットで読むことができます。

高円寺教会ホームページ <http://www.koenji-catholic.jp/>